

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

■ 2023年8月31日(木) 10:10 ~ 12:10 | 血 RY305 良心館3階 R Y 3 0 5 番教室

生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／社会の成熟と生き方、そして Well-Being—産業・健康・文化—

コーディネーター：林 洋輔（大阪教育大学）

新型コロナウイルスの蔓延および解決策の模索において、私たちは「ウエル・ビーイング Well-Being」を鍵語として討議を重ねた。スポーツ産業の興隆と人々がよく生きることの実質としての Well-Being の両立は、いかにして可能か。また体育ならびにスポーツにおける Well-Being の実現を企図して子どもたちの福祉に焦点化した議論は、いかなる稔りを私たちにもたらしたのか。こうした問いをめぐる討議の成果として、最終年度の本シンポジウムにて次の三つの問いを興す。

第一に、体育学はスポーツをはじめ身体活動を伴った「健康で文化的な生活」の実質をどう捉えるのか。第二に、いわば「動けるからだ」としての人間の身体はどのような軌跡を辿って育ち、栄え、また衰えるのか。そして第三に、「からだ」が育ち行くために欠かし得ぬ産業活動とそれを支える科学研究は、福祉ある生活としての Well-Being にどのような恩恵を供するのか。

体育学の研究成果により人はどのような暮らしを営み、またいかなる科学に支えられつつ人はその生涯を送るのか。本シンポジウムが講演そして共同討議を通じて目指すのは、体育学の研究成果に裏付けられた Well-Being の実質解明、言うなら「体育とスポーツある善き生き方」の描き出しである。

[生涯スポーツ-SB-1] 「ポスト・スポーツ」のパースペクティブから見る“ヒューマニティ（人間性）”と Well-Being

*山本 敦久¹ (1. 成城大学)

[生涯スポーツ-SB-2] 地域高齢者を対象とした小規模トレーニング施設「十坪ジム」事業の発想、展開、隆盛、衰退の経緯

*小林 寛道¹ (1. 静岡産業大学)

[生涯スポーツ-SB-3] バーチャルスポーツは体育・Taiikuになりうるか

*萩原 悟一¹ (1. 九州産業大学)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題B】生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／社会の成熟と生き方、そして Well-Being—産業・健康・文化—

コーディネーター：林 洋輔（大阪教育大学）

2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10 RY305 (良心館3階 R Y 3 0 5 番教室)

新型コロナウイルスの蔓延および解決策の模索において、私たちは「ウエル・ビーイング Well-Being」を鍵語として討議を重ねた。スポーツ産業の興隆と人々がよく生きることの実質としての Well-Being の両立は、いかにして可能か。また体育ならびにスポーツにおける Well-Being の実現を企図して子どもたちの福祉に焦点化した議論は、いかなる稔りを私たちにもたらしたのか。こうした問いをめぐる討議の成果として、最終年度の本シンポジウムにて次の三つの問いを興す。

第一に、体育学はスポーツをはじめ身体活動を伴った「健康で文化的な生活」の実質をどう捉えるのか。第二に、いわば「動けるからだ」としての人間の身体はどのような軌跡を辿って育ち、栄え、また衰えるのか。そして第三に、「からだ」が育ち行くために欠かし得ぬ産業活動とそれを支える科学研究は、福祉ある生活としての Well-Being にどのような恩恵を供するのか。

体育学の研究成果により人はどのような暮らしを営み、またいかなる科学に支えられつつ人はその生涯を送るのか。本シンポジウムが講演そして共同討議を通じて目指すのは、体育学の研究成果に裏付けられた Well-Being の実質解明、言うなら「体育とスポーツある善き生き方」の描き出しである。

[生涯スポーツ-SB-1]「ポスト・スポーツ」のパースペクティブから見る “ヒューマニティ（人間性）”と Well-Being

*山本 敦久¹ (1. 成城大学)

<演者略歴>

上智大学文学部保健体育研究室を経て、2012年より成城大学に勤務。専門は、スポーツ社会学、カルチュラル・スタディーズ学会。2022年よりカルチュラル・スタディーズ学会幹事・大会実行委員長。

近年、スポーツは二つの局面において近代の規範的な「人間」のあり方に対して鋭い問いを提起している。この問いに与えられた概念を「ポスト・スポーツ」と呼びたい。近年、多くのアスリートたちが、BLM（ブラック・ライヴズ・マター）運動や# MeToo、フェミニズム運動の世界的なうねりを引き起こす重要な存在となっている。彼ら／彼女らの動きは、西洋白人男性中心主義やジェンダーの二元性、ヘテロセクシュアリティ、そして健常さの規範を理想的な身体としながらグローバルに君臨してきた近代スポーツへの厳しい異議申し立てと言えるだろう。SNSのような新しいメディア環境に繋がったアスリートたちが、既存の社会における支配的な社会関係を組み替える「ソーシャルなアスリート」として登場している。また、近代スポーツは自然／文化の二元論を維持しながら「人間中心主義」を謳ってきた。しかしポスト・スポーツの時代において、アスリートたちは新しいテクノロジー（機械、非人間）を部分とする身体を形成している。スポーツの身体は、もはや「生身」とその文化的加工・規律訓練を意味するのではなく、機械（モノ、テクノロジー）や情報（データ）や自然環境を組み込んでいる。このような身体のリアセンブリーは、近代の理想的な人間性を越えて、多様な差異を多様なままに接続／非接続する。この視座からスポーツや体育が生み出す“Well-Being”について考えていきたい。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題B】生涯スポーツは、人・地域社会・産業といかに関連するか

生涯スポーツ研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／社会の成熟と生き方、そして Well-Being—産業・健康・文化—

コーディネーター：林 洋輔（大阪教育大学）

2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10 RY305 (良心館3階 R Y 3 0 5 番教室)

新型コロナウイルスの蔓延および解決策の模索において、私たちは「ウエル・ビーイング Well-Being」を鍵語として討議を重ねた。スポーツ産業の興隆と人々がよく生きることの実質としての Well-Being の両立は、いかにして可能か。また体育ならびにスポーツにおける Well-Being の実現を企図して子どもたちの福祉に焦点化した議論は、いかなる稔りを私たちにもたらしたのか。こうした問いをめぐる討議の成果として、最終年度の本シンポジウムにて次の三つの問いを興す。

第一に、体育学はスポーツをはじめ身体活動を伴った「健康で文化的な生活」の実質をどう捉えるのか。第二に、いわば「動けるからだ」としての人間の身体はどのような軌跡を辿って育ち、栄え、また衰えるのか。そして第三に、「からだ」が育ち行くために欠かし得ぬ産業活動とそれを支える科学研究は、福祉ある生活としての Well-Being にどのような恩恵を供するのか。

体育学の研究成果により人はどのような暮らしを営み、またいかなる科学に支えられつつ人はその生涯を送るのか。本シンポジウムが講演そして共同討議を通じて目指すのは、体育学の研究成果に裏付けられた Well-Being の実質解明、言うなら「体育とスポーツある善き生き方」の描き出しである。

[生涯スポーツ-SB-2]地域高齢者を対象とした小規模トレーニング施設「十坪ジム」事業の発想、展開、隆盛、衰退の経緯

*小林 寛道¹ (1. 静岡産業大学)

＜演者略歴＞

1970年東京大学大学院教育学研究科修了（教育学博士）、’70～名古屋大学、’86～04東京大学大学院総合文化研究科教授、’04～14東京大学特任教授 日本大学特任教授、静岡産業大学客員教授、2023年現在 静岡産業大学特別教授 スポーツ医科学センター長

世界一流スポーツ選手の走技術の基礎原理を体験的に習得する「足が速くなるマシン」（スプリントトレーニングマシン）を1995年に開発した。このマシンに含まれる要素を発展させ「船漕ぎマシン」「車軸移動式パワーバイク」など20種類の「おもりの負荷を用いないトレーニングマシン」を開発し「認知動作型トレーニングマシン」と名付けた。筋肉痛が起きにくい、力を抜いて動作する、体幹深部筋を無理なく強化する、脳の活性化をもたらす、歩行動作や走動が改善する、などのことから、地域高齢者を主対象とする小規模トレーニングジム（十坪ジム）を徒歩10～30分圏内に多数づくり、地域の活性化を促すとともに高齢社会の健康増進事業を2004年から展開した。NPO法人を立ち上げ、指導者は地域の中高齢者を養成し、最高齢指導者は91歳であった。最盛期には、柏市内に10店舗、会員数1650名となったが、コロナ禍により、現在は会員数500名。事業承継により、柏市内に5店舗、NPOは解散した。理想とした理念、発展と隆興、衰退、課題などを18年間の事業経営の経緯を踏まえて発表する。現在の会員の平均年齢は70歳代後半、80歳代は多数。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題B】生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

生涯スポーツ研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／社会の成熟と生き方、そして Well-Being—産業・健康・文化—

コーディネーター：林 洋輔（大阪教育大学）

2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10 RY305 (良心館3階 R Y 3 0 5 番教室)

新型コロナウイルスの蔓延および解決策の模索において、私たちは「ウエル・ビーイング Well-Being」を鍵語として討議を重ねた。スポーツ産業の興隆と人々がよく生きることの実質としての Well-Being の両立は、いかにして可能か。また体育ならびにスポーツにおける Well-Being の実現を企図して子どもたちの福祉に焦点化した議論は、いかなる稔りを私たちにもたらしたのか。こうした問いをめぐる討議の成果として、最終年度の本シンポジウムにて次の三つの問いを興す。

第一に、体育学はスポーツをはじめ身体活動を伴った「健康で文化的な生活」の実質をどう捉えるのか。第二に、いわば「動けるからだ」としての人間の身体はどのような軌跡を辿って育ち、栄え、また衰えるのか。そして第三に、「からだ」が育ち行くために欠かし得ぬ産業活動とそれを支える科学研究は、福祉ある生活としての Well-Being にどのような恩恵を供するのか。

体育学の研究成果により人はどのような暮らしを営み、またいかなる科学に支えられつつ人はその生涯を送るのか。本シンポジウムが講演そして共同討議を通じて目指すのは、体育学の研究成果に裏付けられた Well-Being の実質解明、言うなら「体育とスポーツある善き生き方」の描き出しである。

[生涯スポーツ-SB-3]バーチャルスポーツは体育・Taiikuになりうるか

*萩原 悟一¹ (1. 九州産業大学)

<演者略歴>

米国アーカンソー州立大学大学院修了 (M.S. Sports Administration)、九州工業大学大学院生命体工学研究科脳情報専攻短縮修了 (博士 (学術))。国立大学法人鹿屋体育大学大学院准教授を経て現職。専門はスポーツマネジメント。その他、株式会社リトルソフトウェアCAOを務めるほか、スポーツ庁長官賞などの受賞歴。

「Taiikuとは人間の幸福における身体的ならびに社会的基盤づくりに貢献する身体運動の総称 (林, 2020)」であるならば、バーチャルスポーツは体育・Taiikuになりうるか。体育・スポーツ科学分野では、バーチャルスポーツの効果を懐疑的に見ている者が多いのが現状ではないだろうか。バーチャルスポーツの研究を進める際に世界的に研究のキーワードとなっているのがエクサゲームである。エクサゲームは、フィットネス、教育、健康の分野で新たな世界のトレンドとなっているバーチャルスポーツの一種だとされている。エクサゲームは、一般的に体の動きを必要とするデジタルゲームと認識され、アクティブなゲーム体験が身体運動の一形態としてとらえられている。エクサゲームが普及してきたことで、その有用性が体育・スポーツ科学分野でも主張されるようになってきている。例えば、American College of Sports Medicineでは、エクサゲームが「子供や青少年の身体活動と健康を促進する“フィットネスの未来”」と紹介されている (Benzing & Schmidt, 2018)。